

【研究ノート】

# グローバル人材育成のための教科開発に関する一提案

—各教科の特色を活かした教育の視点から—

稲葉 みどり

愛知教育大学教育学部

## 要約

本稿では、グローバル人材の資質・能力の育成を教科教育の中でどのように培うかを考える。中等・高等教育機関で各教科、専門分野に携わる10名の教員に1) グローバル人材とはどのような資質を持つ人か、2) 学校教育の中で培うべくグローバル人材の資質・能力は何か、3) 各教科、専門分野の立場からグローバル人材の育成にどのような役割が果たせるかに関する意識について調査した。教員からは、グローバル人材の資質・能力に関する様々な考え方、及び、各教科の特色を活かしたグローバル人材育成教育等、示唆に富んだ回答が得られた。ここでは、それらの中から英語科教育、技術科教育、音楽科教育、体育科教育、幼児教育、特別支援教育に関するものを選び、教育の構想、指導内容、具体的な方策等を一試案として提示した。そして、各教科に内在する「グローバル要素」を見つけ、それを明確化してシラバスの中に位置づけるとともに、教育実践を通じて得られた知見を構築し、さらなる深化・進化に向けて再構築を繰り返していくという手順をグローバル社会のニーズに応える新しい教科開発の方向の1つとして提案する。

## キーワード

グローバル人材の資質・能力、教科教育、教科開発、グローバル要素、学校教育

## 1. はじめに

現代社会のグローバル化に伴い、日本には国際的な舞台で活躍できる人材の育成が喫緊の課題となっている。ここでは、グローバル人材の資質・能力の育成を学校教育の中でどのように実現していくかを取り上げる。特に各教科の中でどのような教育をしていくべきかを考える。英語科教育、技術科教育、音楽科教育、体育科教育、幼児教育、特別支援教育の観点から、その分野の教育に携わる教員の意識を基に、各教科の立場からグローバル人材の資質・能力の育成の方法を模索し、その方策を一例として提案する。

教員の意識調査の前半では、文部科学省(2011)の提示するグローバル人材の概念についてどう思うかを質問した。後半では、グローバル人材とはどのような資質を持つ人だと思えるか、学校教育の中で培うべくグローバル人材の資質・能力は何か、各教科、専門分野の立場から、グローバル人材の育成にどのような役割が果たせるかを回答してもらった。稲葉(印刷中)では、前半の文部科学省(2011)によるグローバル人材の要素と概念についての教員の意識を取り上げたので、本稿では、後半のグローバル人材の資質・能力の養成に向けて、各教科

においてどのような要素を盛り込んでいくべきかを個々の教員の調査の質問の回答を基に考え、教科開発の糸口を探る。そして、今後のグローバル人材の資質・能力をめざした教育の推進のための予備的な考察をすることが目的である。

## 2. グローバル人材の概念

### 2.1 文部科学省(2011)の掲げる概念

グローバル人材の資質・能力について、文部科学省(2011)は、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」と定義している。そして、「グローバル人材」の概念に含まれるものとして、表に示した要素を掲げている。これらに加え、「グローバル人材」に限らずこれからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質として、「幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまと

める) リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等」を挙げている。

【表: グローバル人材の概念に含まれる要素(文科省)】

	キーワード
1	語学力・コミュニケーション能力
2	主体性・積極性、チャレンジ精神
3	協調性・柔軟性、責任感・使命感
4	異文化に対する理解
5	日本人としてのアイデンティティ
6	幅広い教養と深い専門性
7	課題発見・解決能力
8	チームワーク・リーダーシップ
9	公共性・倫理観
10	メディア・リテラシー

## 2.2 グローバル人材の資質・能力に関する教員の意識

ここでは、文部科学省(2011)の掲げるグローバル人材の資質・能力の要素と概念の捉え方に関する教員の意識<sup>1)</sup>について、稲葉(印刷中)をもとに概略を記す。

まず、語学力・コミュニケーション能力については、言葉の力はコミュニケーションを円滑に進めるのに必要な道具であるが、必ずしも英語に限定されるものではなく、他の外国語や非言語を含め様々な手段があり、何らかの手段を持つことが必要であると概ね捉えている。次に、主体性・積極性、チャレンジ精神等に関しては、「他者と積極的に関わり合いを持つとする姿勢」、「急激な世界情勢の変化に柔軟に対応できる資質や能力や異文化に対する寛容な態度」「チャレンジ精神を持続するため、失敗をしても立ち直る力が必要」等、多様な捉え方が見られた。そして、アイデンティティについては、「日本文化のすばらしさを伝えられ、日本人としての誇りを持っていること」等、誇りを持つことの重要性を指摘するものが多かった。これらは対象となった教員のみ意識であるが、この分野の研究を行う上で捉えておくべき内容として提示しておく。

## 3. 研究の方法

### 3.1 インフォーマント

インフォーマントは、中等・高等教育機関の教員10名である。教職歴5年程度3名、15年~20年5名、21年以上2名である。調査資料は、平成25年10月に実施したグローバル人材の資質・能力に関する大学院博士課程の授業で課題としたワークシート<sup>2)</sup>の記述である。これらの教員等をインフォーマントに選んだのは、ある程度の教員歴を持ち、博士課程に在学して研究も行っていることから、教育現場での実践や理論をもとに多角的な視点からグローバル人材の資質・能力の育成についての考え方や教科開発に関する提案が得られ

るのではないかと考えたからである。

### 3.2 ワークシートの内容

授業は、「グローバル人材育成と教科開発学—あなたの教育・研究が果たす役割を考える」というテーマで実施した。その事前課題として、グローバル人材の育成、資質・能力について考える質問を提示した。文部科学省(2011)の提示するグローバル人材の概念についてどのように考えるか、及び、以下の5つの質問である。

- (1) グローバル人材とはどのような資質能力を持つ人だと思いますか。理由も答えてください。
- (2) グローバル人材を育てるにはどのようにすればよいのでしょうか。学校教育の中で育成する資質能力の中で重要だと思うものを挙げてください。
- (3) グローバル人材の育成の方法について考えましょう。育成すべき資質能力の例とその具体的な方法を提示してください。
- (4) あなたの教育・研究はグローバル人材育成にどのような役割を果たしますか。グローバル人材に必要な資質能力の中のどのようなものの育成に関わっていますか。あなたの教育研究が一般の人材育成においてめざすものは何ですか。
- (5) あなたの持っているグローバル人材としての資質能力はどのようなものですか。1つ以上挙げてください。また、身につけたいと思うグローバル人材の資質能力は何ですか。

### 3.3 考察の手順

インフォーマントから得られた回答を提示する。まず、その教員の立場を紹介し、その教員がグローバル人材の資質・能力についてどのように捉えているかを見る。次に、学校教育の中で培うべく資質・能力、及び、具体的な育成の方策に関する考えを紹介する。そして、各教科、または、専門分野の観点からグローバル人材の育成に果たす役割や目標等を1つの視点として捉え、グローバル社会のニーズに応えるための教科開発へのヒントを得る。よって、本稿で取り上げる内容は、各教科におけるグローバル人材育成に関わる可能性のほんの一例として論ずるのであって、ここで取り上げる以外にも様々な観点からのアプローチがあると考えられる。

## 4. 各教科における資質・能力育成の可能性

### 4.1 英語科教育：認知言語学の視座から

英語科教育の観点から、グローバル人材の育成と資質・能力について考える。大学で英語教育に携わる I

氏は、認知言語学という専門分野から育成される資質や能力について、(4.1)のような考えを示している。

- (4.1) 認知言語学と英語教育、言語コミュニケーション論を専攻していますが、認知言語学を学んでから、事物に対する多様な捉え方がよりできるようになり、様々な価値を認めつつ、共生できるよう調整できる能力がついてきたかと思えます。日本語と英語における捉え方の違いによる言語表現の違い、人の持つ認知能力の一つ、アナロジー力を利用した新しい外国語（英語）教育法を模索しています。(I氏)

I氏の基軸とする「事物に対する多様な捉え方ができること」「様々な価値を認めつつ、共生できるよう調整できる能力」は、様々な言語や文化的な背景を持つ人々と共生していくのに必要で、外国語（英語）の技能を身につけることと合わせて、外国語教育を進める新しい視点の1つと考えられる。

グローバル人材の資質・能力について、I氏は、異文化間コミュニケーションによる相互理解、多様な価値観の容認と共生、状況に応じた柔軟な物の見方や判断ができることに着目し、以下の(1)～(3)のように捉えている。

- (1) コミュニケーションの難しさを認識し、寛容 (tolerance) と否定的能力 (negative capacity) を持つ異文化間コミュニケーションが取れる。
  - (2) 自己の価値観を発信し、理解を促すと共に、相手の価値観も認め、共生できる方法を見いだせる。
  - (3) 規範的とされる事柄やルールも、具体事例や現状を見ることで、状況にあった方法を見いだせる。
- (以上、I氏)

また、学校教育の中で培う資質・能力として、「広い意味での異文化間コミュニケーション力（隣の人も異文化）」「物事を多元的に捉えられる能力」「例外事例対応能力」の3つを挙げ、具体的な教育の方策として、「認知言語学の言語観、文法観を参照して、言語コミュニケーションにおける誤解と理解のメカニズムを理論と実践を交えて手続き的知識として学ぶ科目を開設する」ことを提案している。「特に認知言語学は、言語現象を分析することのみでなく、人が事態をどうとらえるかに関わる分野である特性上、社会を生きていくうえで、様々な問題を解決する糧になる」という考えを示している。

さらに、I氏は、アナロジー力を利用した新しい外国語（英語）教育法を英語教育に導入することを構想

し、その教育への役割・貢献について以下のような考えを述べている。

- (1) 日本語と英語の事態認識の違いを学ぶことで、物事に対する多面的な捉え方ができるようになる教育
  - (2) 多様な価値観を認めて、コミュニケーションが取れる能力の育成
  - (3) (そのツールとなる) 外国語としての英語運用能力の育成
- (以上、I氏)

以上、認知言語学（「感覚英文法」<sup>3)</sup>）の立場から英語教育の役割や意義を述べたI氏の考えは教育の研究や現場に新たな知見を提供するものであると考えられる。外国語（英語）を学ぶことにより、物の見方を多面的にし、それにより異文化理解が促進され、多文化共生社会を生き抜くグローバル人材の資質・能力を身につけることができるという新しい捉え方である。特に、このような視点を明確化にし、意識的に外国語教育に盛り込んでいくことは、外国語教育の教科開発の1つの視座と考えられる。

#### 4.2 音楽科教育：多様な音楽との出会いから

音楽科教育の観点から、グローバル人材の育成と資質・能力について考える。中学校音楽科の教員であるS氏は、自身の持つグローバル人材の資質・能力について、以下のように考えている。

- (4.2) 私は公立中学校に勤務し、音楽科を担当している。学生時代には、西洋音楽しか勉強してこなかったが、実際の授業では西洋音楽ばかりでなく、我が国および世界の諸地域の多様な種類の音楽を扱っていかねばならない。(学習指導要領の改訂によって、次第にそのようなことが求められるようになってきている。) 多様な音楽について知れば知るほど、自分の考え方が偏っていることに気づかされるのである。(S氏)

S氏は、多様な音楽に触れることが偏った考えに気づく糸口になるという考えを持っている。この点は、異文化に触れることの重要性を示唆している。そして、学校教育の中で培う資質とその方法グローバル人材の資質・能力について、異文化を受け入れる寛容な心の育成に着目し、以下のように述べている。

- (4.3) 世界の諸地域に存在する音楽について理解しようとするとき、その背景となる文化について

の理解が不可欠となる。その地域の音楽は、言語、宗教、歴史、自然風土、生活習慣などと関わって生まれ、存在しているため、それらと切り離して考えることはできない。自分たちと異なる文化について理解すること、異文化同士が互いに理解することは、とても難しいことである。しかし、価値観の違いや多様な文化に対して、寛容な態度を持つことが大切だと考えている。これこそが、グローバルに活躍する人材に必要な資質として、私が最も重視したいことである。(S氏)

S氏は、異文化に属する人々が互いに理解することは価値観や文化の違いがあり、それほど容易ではないことを指摘している。そして、自分とは違うものを受け入れる姿勢、寛容な態度を持つことが大切であると主張する。この点は、共生社会を築いて行く上で、大切である。特に多言語、多文化化する日本の学校や社会においては、これまでの日本の慣習や規範では捉えきれないような異文化の波が押し寄せてきているからである。

このような捉え方を背景として、S氏は学校教育の中で培うグローバル人材の資質・能力として、以下の3点を提案している。

- (1) 他者やもの・ことと積極的に関わることができる。  
(関わろうとする)：よりよいかかわりあいを持ちながら、ともによりよく生き、よりよい社会を実現していくことが大切である。
- (2) 異文化に対する寛容さと深い理解：異なる文化圏の人々と接するとき、相手のことを受け入れる姿勢が大切だと考える。寛容さを持つことによって、他者とよりよいかかわることができる。
- (3) 語学力がある：言葉はコミュニケーションを図るための手段として必要なものである。(以上、S氏)

さらにS氏は、音楽科の教育の中で培うグローバル人材の資質・能力について、「多様な声を駆使して表現力を磨いていく学習」を基軸に、次のような考えを提案している。

- (1) 創造的な人間への成長、豊かな感性や新しい発想力を育む。
- (2) 世界の諸地域の多様な声の文化に触れることで、異文化に対する寛容な態度を育てる。多様な価値観を認め、互いに尊重しあうことの大切さを学ぶ。このことがよりよいかかわりあいへとつながっていく。

- (3) 我が国の伝統的な文化について深く理解する機会となる。自分の国についてよりよく知ることから、他者理解と持つながっていく。

(以上、S氏)

S氏の発想は、音楽を通して、創造的な人間への成長や豊かな感性や新しい発想力を育むことは人間としての教育で必要であり、同時にグローバル人材の資質・能力にも通じるものであるという考えに基づいている。音楽教育がグローバル人材の育成に大きな役割を果たせる可能性を示唆している。また、音楽の美しい調べに浸り、感動を共有することは、文化や価値観の違いを超えて、多彩な価値観を容認し、互いに尊重し合う態度を育成するのに役立つという音楽科学習指導要領(文部科学省, 2008d)とも矛盾しない。さらに、日本の伝統的な音楽文化に触れることは、日本人としてのアイデンティティの確立とも関わりがあるであろう。グローバル人材の資質・能力に音楽科教育の果たす役割を明確に打ち出した教育プログラムを作成していくことは、音楽科教育の教科開発に求められる方向の1つと思われる。

#### 4.3 技術科教育：ものづくりの観点から

技術科教育の観点から、グローバル人材の育成と資質・能力について考える。中学校技術科の教員のY氏は、自身の持つグローバル人材の資質・能力に関して、物づくりの観点から以下のように述べている。

- (4.4) 手や頭を使いながら、ものをつくる学習の楽しさは世界共通のものがある。私は動力的なおもちゃともいえるような教材開発をしているので様々なところで簡単にできる教材をネタに子どもたちの学習に入っている。これまでモンゴル、ブラジル、タイでの実績がある(Y氏)。

Y氏の取り組みは、手先の器用さを伸ばす、もの作りの楽しさを味わう、動くおもちゃという興味を引く物を扱う、それも簡単に制作できるものを扱っている点で、技術科教育の目標の1つを実現するものであると考えられる。また、ものを制作することの楽しさは世界共通という点への着眼は、技術科教育(学校教育)におけるグローバル人材の育成をめざした教科開発に導入しやすい観点であると考えられる。

Y氏はグローバル人材が持つべき資質・能力について、次のような考えを示している。

- (1) コミュニケーション能力：人と接して伝えられな

ければお互い理解できない。

- (2) 問題解決的な力：自ら問題を解決できないと自己実現はできない。
- (3) 情報活用能力：メディアのあふれた社会を生きるために必要。
- (4) 協調性を持つこと：人と接するとき協調しないと議論ができない。
- (5) 学習するチームとしての力を持つ：チームとして学習し、向上していくのがこれからの社会。

(以上、Y氏)

これらの考えの重要性は、ものづくりを例にとって考えるとわかりやすい。コミュニケーションを通してお互いの考えや気持ちを理解し、突き当たる問題に知恵を合わせて解決策を見だし、現代社会の様々な技術や情報を有効に活用し、役割分担など協調性を持って協働し、チームとして取り組む姿勢により、一人ではできないような大きな可能性を追求できるということであろう。これらはグローバル社会において大切な資質・能力の1つと考えられる。

Y氏は、技術教育の役割は、「世界共通で持つ技術リテラシー、ものづくりのサイクル（構想－設計－制作－評価－発表）」の教育を通じて、「共にものをつくることで生まれる協同的な達成感」を得ることであると述べている。その過程で、子どもたちは、コミュニケーション能力や問題解決能力を育み、協調性やチームとして共同することの重要性を学ぶ機会を与えられる。他者の考えを理解したり、協力して問題を解決したり、個人ではなくチームとして活動することでより大きな成果が期待できることを学ぶきっかけとなる。Y氏は、「協調性」を育む具体的な方法として、「協同的に学習することができる環境で学ぶ」ことを提案している。

これらの内容を技術教育に積極的に取り入れていくことが、グローバル人材の資質・能力をも射程に入れた技術の教科開発の方向の1つと思われる。特に、ものをつくることの楽しさを感じ、共にものをつくることで生まれる協同的な達成感を味わうことは、グローバル人材の育成の観点からは、相互理解を深める手立てとして着目できる。

Y氏は、この他、教員が身につけたい資質・能力として、「メディアを利用して、説明できる能力」「実物を通して、体験的に学習できる環境づくり」「チームで協調、協同的に1つのことに参加できる能力（これはものづくりに代表される）」を挙げている。

#### 4.4 体育科教育：心と体に着目して

体育教育の観点から、グローバル人材の育成と資質・能力について考える。大学で体育教育に携わる K

氏は、グローバル人材の資質・能力について、心と体に着目し、次のような捉え方を示している。

- (1) 姿勢のよい人：相手に不快感を与えない
- (2) 笑顔で挨拶出来る人：相手の笑顔を引き出すことができる
- (3) 正直な人：文化の遣いによる誤解があっても乗り越えることができる
- (4) 身になることができる人：相手の気持ちだけでなく身体の具合に対しても配慮できる
- (5) チームをまとめることができる人：目標と期間を明確にし、ヒューマニティを考慮し合意形成できる

(以上、K氏)

これらの資質・能力は、まわりの人に気を配り、相手に対する深い思いやりの気持ちから湧き出るもので、そのような暖かい心を持つことの重要性を示している。姿勢のよい人というのは、心に残るべきところがなく、自信を持って堂々としていることと解釈できる。また、誤解に対して寛容になれる人は、心の広さを表している。身になることができる人というのは、相手の立場や気持ちを察することができる人であろう。さらに、チームをまとめるというのは、人間関係を配慮した高度な能力であると考えられる。

学校教育の中で培うグローバル人材の資質・能力として、Y氏は、「(1) 感性、(2) 身体感覚、音楽感覚、芸術感覚、(3) チームワーク力、(4) 意志決定力、(5) 合意形成力」を挙げ、その具体的な方策の例として以下の3つを提案している。

- (1) 感性、身体感覚、音楽感覚、芸術感覚を養うために 体育・音楽・美術、技術・家庭の授業を充実させる。
- (2) 課外活動を活性化させ、チームワーク力を促進させる。
- (3) 意志決定、合意形成力を育むために、各種ディスカッションやロールプレイを中心とした授業方法を推進する。

(以上、K氏)

豊かな感性を身につけることは、言語や文化背景の異なる人と関わる時、相手の気持ちや立場を理解するのを助けるであろう。チームワーク力は、個人を越えた力を発揮できる可能性を持っている。意志決定、合意形成力は国際社会で正に求められる資質の1つであろう。

K氏は、自身の研究の目標とグローバル人材の育成

の関わりについて、以下のように述べている。

- (4.5) 身体知の構造と内容とその範囲を明らかにし、それらを獲得するための方法を明らかにすることによって、知識の習得に偏ってしまった日本の教育活動全般を見直すための契機を発信することができる。そのことが、グローバル人の育成につながる。(K氏)

K氏のグローバル人材育成に関する洞察は、人として備えるべき大切な心や体に着目し、今日育むべき重要な資質・能力を取り上げている。これは、日本のみならず、世界の学校教育の中でも欠かすことのできない内容で、教科開発の1つの方向の可能性と考えられる。

最後に、K氏が持つユニークな能力、及び、身につけたいグローバル人材の資質を(4.6)を紹介する。

- (4.6) その人の肌の色や髪の色や表情など外から見える身体ではなく、その奥にある骨の組み立て方やその骨の動かし方(=身のこなし)から、その人の人となりがある程度把握することができる能力を持っている。身につけたい能力は、深い話ができる英語力。(K氏)

#### 4.6 特別支援教育：ユニバーサルデザインの観点から

特別支援(障がい児)教育の観点から、グローバル人材の育成と資質・能力について考える。大学で障がい児保育に関する教育研究に携わっているO氏は、ユニバーサルデザインを取り入れた授業に着目し、以下のように述べている。

- (4.7) 聴覚障害児教育では、手話や身振り・表情(目力も含む)を併用することで、ことば以外の情報を伝え、コミュニケーションする。ユニバーサルデザインは、国籍、障害の有無にかかわらず、情報を伝える意図を持つ。幼児教育の現場にコミュニケーションの力を育成する指導・支援に活かすこと、聴覚障害児教育の指導スキルを活かすこと、に注目しています。(O氏)

ユニバーサルデザインとは、年齢、性別、国籍、身体的な能力などの違いに関わりなく利用しやすく設計しようという考えに基づいたものである。この考えを援用したのが、ユニバーサルデザイン授業で、すべての児童生徒にとっての「わかる、できる」授業をめざしている。文部科学省(2012)の「共生社会の形成に

向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」では、「すべての児童生徒にわかる教育を考えるには、子ども一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援が必要である。障害のある子どもが、その能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加することができるよう、医療、保健、福祉、労働等との連携を強化し、社会全体の様々な機能を活用して、十分な教育が受けられるよう、障害のある子どもの教育の充実を図ることを目的としている。(すべての子どもにとっても、良い効果をもたらすことができるものと考えられる)」とされている。

O氏は、特別支援教育(障がい児教育)の目標を「わかりにくい子どもたち(ことば、認知、情緒)がわかる手立ての構築」と位置づけ、グローバル人材の育成との関わりを以下のように捉えている。

- (4.8) ことばの発達に遅れのある子どもたちがわかって楽しめる授業は他の子どもたちもわかって楽しむことができる。ユニバーサルデザインを取り入れた教室の環境や授業は、グローバル人材に必要な資質(みんながわかる、伝え合い)の育成をめざしているといえる。(O氏)

O氏は、グローバル人材の資質・能力として、「人間力(基本的に人間が好きで、人との関係を築くことにエネルギーを注ぐことができ、人を引きつける魅力を持つこと)」「他者理解力」「問題解決能力」「自己管理能力」の5つを挙げている。そして、学校教育の中で子どもが培う資質・能力として、以下のような資質・能力の育成が大切であると述べている。

- (1) 子どもの「意欲」「向上心」
- (2) コミュニケーション能力と他者理解力
- (3) 思考力
- (4) レジリエンス(立ち直る力)と自尊感情
- (5) 表現力(ことばで示す・資料を作って示す・プレゼンテーション)

(以上、O氏)

これらを実現するには、「学校教育の中で課題に向き合い、達成を経験することで、子どもの成長を引き出すことが大切」で、「自分の持つ力よりも少し高い目標を与えれば、取り組む意欲を喚起することができる」と述べている。また、「大学における専門性を教材に落とし込んだ魅力ある授業の提供と、それにより本物の子どもの知識欲を喚起すること」や「チームで問題解決することで思考力やコミュニケーション能力を高

めるプログラムの構築」が重要な手立てとなるとO氏は述べている。

以上、障がい時教育の観点からグローバル人材の育成について考えた。ここで提案された教育理念は、障害のある子どもでなくとも、外国人生徒児童（マイノリティ）や一般の生徒児童にも十分に通じるものである。特に多言語・多文化化しているような学校現場では、クラスの全員が「わかる、できる」をめざした授業の開発が課題の1つであると思われる。

## 5. まとめ

本稿では、グローバル人材の資質・能力の育成を各教科の教育の中でどのように培うかを教員への意識調査を基に考えた。ここで取り上げた提案は、インフォーマントとなった限られた教員の考えに基づくもので、一般化をめざしたものではない。提案を1つの考え方や方法の例として紹介し、この分野の教科開発の可能性を示すものである。

教員からは、グローバル人材の資質・能力に関する鋭い洞察、学校教育の中で培うべく教育内容や方法に関する豊かな構想、各教科の特色を活かした教育内容や指導法等、精緻で深い思索に基づくものが提案され、グローバル人材の資質・能力に関して多くの示唆が得られた。

英語科教育については、認知言語学の観点から、異文化間コミュニケーションによる相互理解、多様な価値観の容認と共生、状況に応じた柔軟な物の見方や判断ができることに着目し、学校教育の中で培う資質・能力として、「広い意味での異文化間コミュニケーション力（隣の人も異文化）」「物事を多元的に捉えられる能力」「例外事例対応能力」の3つを掲げ、認知言語学の言語観、文法観を反映した言語コミュニケーションの観点を取り入れた教育の可能性を提案した。

音楽科教育においては、「多様な声を駆使して表現力を磨いていく学習」を基軸に、世界の諸地域の多様な声の文化に触れることの重要性を強調した。そして、未知の文化との接触を通して、豊かな感性や新しい発想力、異文化に対する寛容な態度、多様な価値観を認め互いに尊重し合う態度が生まれ、同時に、それは我が国の伝統的な文化について深く理解する機会にもなり得るのではないかという可能性を提示した。

技術科教育においては、物づくりの観点からグローバル人材の資質・能力を考えた。「手や頭を使いながら、ものをつくる学習の楽しさは世界共通のものがある」という立場から、コミュニケーション能力、問題解決的な力、情報活用能力、協調性、学習するチームとしての力を持つことの必要に着目し、もの作りの過程でコミュニケーション能力や問題解決能力を育み、協調

性やチームとして共同することの重要性を学ぶとともに同時に「共にものをつくることで生まれる協同的な達成感」を得ることができるという可能性から教科開発を考えた。

体育科教育においては、心と体を豊かにすることに着目し、学校教育においては、感性、身体感覚、音楽感覚、芸術感覚、チームワーク力、意志決定力、合意形成力の育成を挙げた。感性等を磨けば、言語や文化背景の異なる人の気持ちを理解するのに役立つ。チームワーク力を上げれば、個人を越えた力を発揮できる可能性が高まる。意志決定、合意形成力は国際社会で主体的活動する力に繋がるのではないかという考えを示した。

幼児教育においては、対人関係を築くのに基本的なツールとなる言葉、及び、その発達を促すための指導や体験が重要であることを指摘し、学校教育の中では、特に言語力、論理的思考力、想像力、協調性、積極性の育成が大切で、同時に、これらの能力・資質は、グローバル人材を育成する基礎・土台となり得ることを確認した。

特別支援教育においては、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育を基本において、ユニバーサルデザイン授業の充実を提案した。すべての児童生徒にわかる教育提供し、障害のある子どもが能力や可能性を最大限に伸ばし、自立して社会参加できるよう支援することの重要性に言及した。特に「意欲」「向上心」、「コミュニケーション能力と他者理解力」「思考力」「レジリエンスと自尊感情」「表現力」の育成に着目した。これらの能力を養成するには、子どもが課題の達成感を体験することが、大切で、自分の力よりも少し高い目標を与えることが意欲の喚起に効果的であるのではないかという考えを述べた。特別支援教育のめざすものとグローバル人材の資質・能力の育成とは「共生」という観点で重なり合う点が多くある。

各教科で着目した資質・能力は、語学力・コミュニケーションの能力、異文化理解、課題発見・解決能力、チームワーク等、表1に示した文部科学省（2011）の提示するグローバル人材の概念とかけ離れるものではなかった。また、文部科学省の定義には直接示されていない概念も見られた。これらの能力を突き詰めると、とりたてグローバル人材に限ったものではなく、ごく一般に求められる人としての資質と重なるものがあることがわかった。

## 6. おわりに

グローバル人材の資質・能力の育成を教科学習の中で意識的にとり入れた教育を行うには、まず、教科の特色や学習目標を把握した上で、導入するのにふさわ

しい内容を選定することが必要である。グローバルな資質・能力の育成に直接関わる要素を稲葉(2014)では、「グローバル要素」と呼び、教育の中で明確化して導入することを提案した。教科開発にあたっては、各教科に内在するグローバル要素を見つけ、それを明確化してシラバスの中に位置づけることが重要である(前田・西村, 2013)。育むべき資質・能力を具体的にした上で、到達目標を設定し、適切に指導・評価し、教育実践を通じて得られた知見を構築し、さらなる深化・進化に向けて再構築していくことが大切であると考えられる。絶えず変化するグローバル社会に対応した教育を行うには、時代のニーズに応えるべく新しい教育を創造開発していかなければならないであろう。その際、国際理解教育、グローバル教育、教科教育等の既存の研究・分野から何を受け継ぎ、何を発展させていくかを具体的に提示していくことを今後の課題としたい。

## 注

- <sup>1</sup> 教員をめざす学生の意識については、稲葉(2014)で扱っている。
- <sup>2</sup> ワークシートには、この他、グローバル人材の資質・能力やグローバル人材の育成等に関するいくつかの質問が含まれているが、本稿ではその一部を扱う。
- <sup>3</sup> I氏は、認知言語学を背景とした感覚英文法を今井(2010)の中で提案している。この「感覚英文法」とは、今井氏が命名したもので、認知言語学の研究成果を参照した学校文法とは異なる視点からアプローチした英文法のことである。「感覚英文法」がコミュニケーション能力を高めるために有用であること、和訳をすることでかえって英語理解がしにくくなること、多義語の比喩的ネットワークを意識した理解、冠詞のイメージ、英語の語順における並置の意味、時制、相、動詞や名詞の連続性等がまとめられ、教育現場に新たな知見を提供すると考えられる。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたっては、査読者の方々から有

益なご意見をいただき、御礼申し上げます。筆者の力不足からここでは十分には活かせませんでした。今後の研究の糧とさせていただきたいと思います。また、本稿のインフォーマントとなっていたいただいた教員の方々にも、この場を借りて感謝の意を表します。

## 参考文献

- 稲葉みどり(2014)。「グローバル人材の資質・能力について考えるー英語教員を目指す学生の意識」『愛知教育大学から発信するグローバル時代の英語教育』, 49-59.
- 稲葉みどり(印刷中)。「グローバル人材の育成の観点から構想するグローバル教科学」, 愛知教育大学教科学研究会編『教科学を創る』第2集, 印刷中. 愛知教育大学出版会.
- 今井隆夫(2010)。「イメージで捉える感覚英文法ー認知文法を参照した英語学習法(開拓社言語・文化選書)」開拓社.
- 前田洋一・西村公孝(2013)。「グローバル社会に必要な資質・能力の分析」, 『鳴門教育大学研究紀要』28, 126-135.
- 文部科学省(2008)。「中学校学習指導要領解説 音楽編(第2章各教科第5節音楽第1学年)」2008年7月告示.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/on.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/on.htm). 2014/9/20.
- 文部科学省(2012)。「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」(初等中等教育分科会), 2012年7月23日.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm). 2014/9/20.

【連絡先 稲葉 みどり

E-mail: mdinaba@aeu.ac.jp



# Development to Foster the Global Human Resource Project: Benefits from the Characteristic of Each Subject

Midori Inaba

*Department of Education, Aichi University of Education*

The purpose of this study is to explore how to foster the development of the Global Human Resource Project (MEXT, 2011) in connection with school subjects, such as English, music, technology and physical education, as well as in early education and special education. The questionnaire was devised to collect ideas and opinions about the qualities and capabilities required for the Global Human Resource Project as well as about methods for practicing education in each field of study. The subjects for the questionnaire are ten in-service teachers in middle schools and in higher education in Japan.

The in-service teachers presented incisive ideas and methods. Those in the field of English education proposed that students benefit from the cognitive linguistic approach of language learning through developed competence in cross-cultural communication, multipolar comprehension, and flexible thinking adaptable to situations. Those in technology education proposed that students can learn the importance of teamwork, cooperation and problem-solving abilities through making the kinds of products created in technology education. Cooperation towards a goal of creating something allows students to share in the well-known enjoyment of a finished product. This sense of achievement is an important element to facilitating students' studies. For teachers of music education, exposure to music of different cultures allows students to appreciate different values and promotes mutual understanding. It also allows students to understand the value of Japanese traditional music. In physical education, students learn teamwork, decision-making abilities, and consensus-making ability by playing various sports. In early education, it is important to develop children's language and communication abilities because it plays a role in their creating good relationships with others. Teachers of special education proposed the widespread implementation of universal design classes in order to enhance the understanding of all children.

The major role of the subject development for foster global human resource is to identify a 'global element' internalized in each subject, to create a syllabus clarified it, and to construct a theory through practice.

## **Keywords**

global human resource development, subject development, global element, school education